

行田の路地空間を内包する集合住宅の設計

八代研究室

00212108 設楽 祐一

1. はじめに

郊外に建つマンションは大規模化が進み、各住居の高い独立性と完結性、これによりマンションは戸建に住むものとなっている。しかし、これらのタイプは居室が埋まらず空き部屋になっている状態が多く見られる。

行田にも大型マンションはあるがこれらに対し、ミニマムな一つの都市を行田に計画する。

行田市にはかつて忍城があり、図1のように敷地周辺には複雑に入込んだ路地が多く残っている。これに注目し、この路地空間をプランに取り入れた集合住宅を計画する。

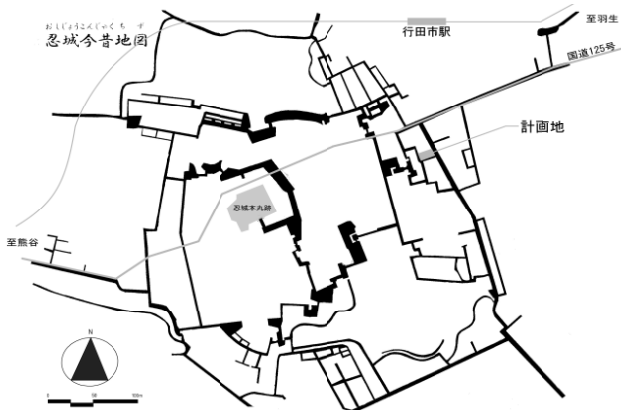


図1 往時の行田の街の街路網(忍城今昔地図による)

2. 敷地

所在地 : 埼玉県行田市新町一丁目

敷地面積 : 約 1250 m²

用途地域 : 商業地域

建ぺい率 : 90%

容積率 : 400%

3. コンセプト

行田市民にとって身体化している城下町の名残である路地空間を動脈とするならば図2のようにさら

に毛細血管の様に細分化し錯綜させ配置および動線計画を設定する。行田の路地には細い路地と広く取られたオープンスペースが点在し、その周囲に住宅が建っている。この生活路を隅々まで張り巡らし、住まうことで、行田の風土や文化を感覚的に身体化することができる。

住居のプライバシーは確保するが、住居間にパブリックな空間を点在させることで偶発的なコミュニティの発生する場所を設ける。ここから新町商店街を始め、行田市周辺に自然派生的にコミュニティが広がる拠点になることを狙う。

4. 計画概要

住戸は4タイプのユニットプランを設定し、全体で15戸の構成となる。

近隣の既存のコンテクストを生かすように街路沿いに住棟が建ち、1階には店舗と集会所を配置している。中庭の接地部分には、通り抜けの路地状の通路があり、2段階に分けて路地を設定する。

大きい路地が住棟の切れ目から入るものと、住戸の間を抜けて通る細い路地がある(図3)。

多数の小規模なセミパブリックな空間が積み重なり、変化に富んだ居住空間をつくりだし、外部空間は住棟群によって半開放的に囲まれた形態になる。

部分と全体とのプロセスの中で、その地区の生活と空間のコンテクストを形成する。この住棟構成は、ヒューマンスケールな規模であり、居住者は適切に領域を形成でき、集住意識を高めることができる。住棟・住戸の入口はできるだけ、パブリックスペースに直結するよう考え、すべての住戸に最低1部屋のフリースペース(屋上庭園、屋上テラス、テラス、前庭)を設ける(図5)。

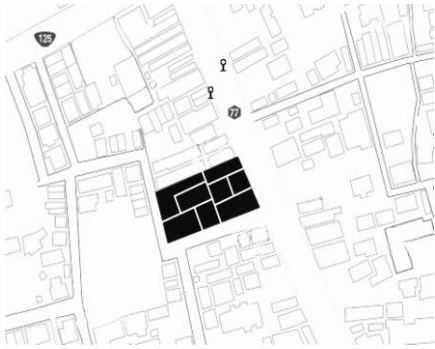


図2 敷地図

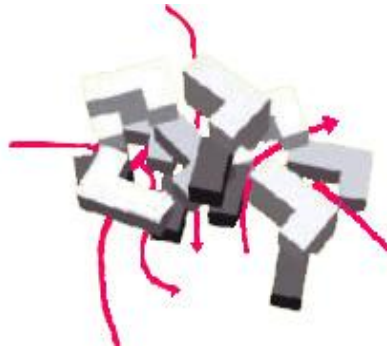


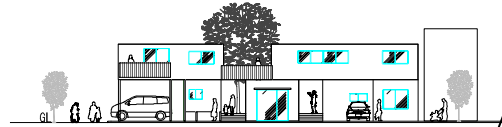
図3 コンセプト



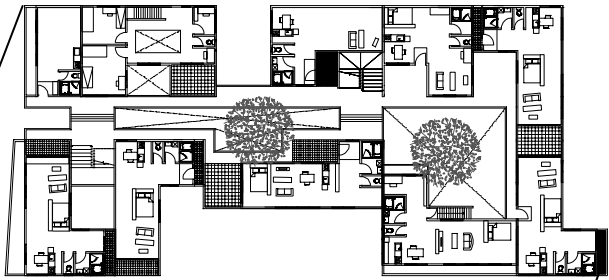
図4 ボリューム模型



West side Elevation



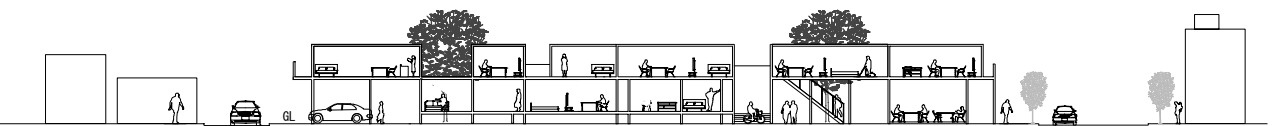
East side Elevation



Site Plan / 1F + 2F Floor Plan



South side Elevation



A-A' Section

図5 配置・平・立・断面図